

どう防ぐ？



子どもの事故

①

大野 美喜子

転倒・転落、窒息、やけど、溺水（できすい）

。子どもが命を失った大けがをしたりする事故が毎年同じように、同じくらいの件数、起きていることを存じでしょうか。

東京消防庁の報告によると、2020年度に日常

生活の事故で救急搬送された乳幼児は8781人でした。東京の人口が日本の10分の1だとすると、全国で毎年約9万人の乳幼児が救急搬送されている計算になります。

次に、学校での事故を見てみましょう。日本スポーツ振興センターは、

19年度に学校管理下で起こった事故（治療費が5000円以上必要になったもの）は約96万件と報告しています。子どもが学校で過ごす時間が1日9時間、年に200日だとすると、約10秒に1人が事故で病院を受診している計算です。

最近では事故予防の重要性の認識も高まり、あちこちで情報を目にするようになりました。国も動いています。消費者庁は事故の現状や予防法に関する情報を、数え切れないほど発信してきました。でも、子どもの事故は予防できていませ

「おおの・みき」 福岡県筑前町出身、神戸大学大学院修了（専門・健康教育）。

ん。

保護者啓発について考えてみます。階段からの転落、お風呂での溺水、電気ケトルによるやけどなどの事故を知らない保護者は、おそらくほとんどいません。しかし、「自分の子どもにも起きるかもしれない」と考えている保護者も、ほほいなくと言ってよいのです。そして、そう思ってもうることができなければ、事故は予防できません。

「知っていたら防げたのに」をなくしたい。こ

「わが家は無関係」なくす

窒息



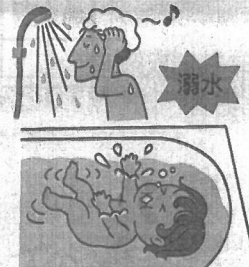
転倒・転落



やけど



溺水



イラスト・カモシタハヤト

れは、私が健康教育を専門としたきっかけです。非常に難問ではありますが、保護者の意識を変える方法論が強く求められているのです。（セーフキッズジャパン理事）

◆ ◆
子どもの事故予防に取り組むNPO法人理事が、事故の特徴と予防策を伝えます。